
Othello

sand

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Othello

【コード】

N0036B

【作者名】

sand

【あらすじ】

白の世界と黒の世界。それぞれの世界に不満をもつ少年と少女。白を黒へ、黒を白へと変えていくこうとする二人の物語。それはまるでオセロのよう……

二つの世界

この世界は二つの世界に別れている。

一つは光に包まれている世界フォース、もう一つは闇に覆われている世界アポピス。

フォースは事件など滅多に起きない平和な世界。アポピスは治安が悪く平和とは遠くかけ離れた世界。

二つの世界は常に表裏一体なのである。だが決して二つの世界を行き来することは出来ない。そこに住む人々も自分の住む世界の存在しか知らない。二つの世界が一つになることなどないのだ。

光に住む少年はこう望む・・・光ばかりが良いとは限らない。毎日が暇だ。この世界に闇があればいいのに、と。

闇に住む少女はこう望む・・・闇なんてもう嫌だ。毎日が悲しいだけだ。この世界に光があればいいのに、と。

二人はそれぞれの望みを叶える為、旅に出る。そして世界も変化を始める。世界がどんな結果になるのかはまだ誰も知らない。二人の望むような世界へと変わるのだろうか？それとも・・・

この旅の果てに何があるのか、自分が望む世界とはいったい何なのだろうか、二人は正反対とも言えども同じことを思い旅をする。決して交わることは無いけれど、同じ時を旅する二人。これは運命なのであるのか？互いのことなど知らず、自分の信じる方へと向かって歩いていく。そんな二人の物語が始まっていく。

白の世界と黒の世界それぞれを変えていこうとする少年と少女。それはまるでオセロのような物語。このゲームの結果はどうなるのであるのか？

闇の世界 1

外から聞こえてくる音は怒鳴り声や悲鳴。時には銃弾の音や轟音も。この世界に安全な場所などどこにもない。ここは闇に覆われている世界アポピス。この世界の治安はとても悪く力のないものはおびえ、隠れているか逃げることしか出来ない。

路地裏に座り込んでいるこの少女も力なきものの一人。体は痩せ細っていてとてもやつれているように見える。隠れるように身を縮ませてパンを隠すように持っている。少女のいる場所の近くまで息を切らしながら走ってくる男がいた。

「あのガキ、どこへ逃げやがった？見つけたらただじゃおかねえ。」
そういつて男はまた走っていった。どうやら少女はあの男の家からパンを盗んできたらしい。少女は男が立ち去ったのを確認してパンを袋にしまった。

「今日は上手くいった・・・早く持って帰らなきゃ。」
そして少女はその場から立ち上がり急いで自分の家へと向かった。

「ただいま、セラ。」

少女は家に無事に着き部屋の奥に横たわっている少女にむかって言った。

「おかえりお姉ちゃん。」

閑散としたこの家はとても狭く寝るためだけのためにあるようなものだ。周りを見る限りこの家にはこの二人の姉妹しか住んではないようだ。

「セラ、今日はパンを持ってきたよ。ちゃんと食べてね？」

そう言っって少女は妹にパンを渡した。

「お姉ちゃんはもう食べたの？」

妹はうつむきながらパンを受けとらずに少女に尋ねた。少女はそ

れに答えず黙っていた。

「本当はお姉ちゃんいつも私にだけくれて何も食べていないんでしよう?」

「そんなこと……」

やっと少女は声を出すことができたがちゃんと言葉にはできないようだ。

「それにいつも、そのパンだっどどこから盗んできているんでしよう?いつも怪我して帰ってくるじゃない。」

「そんなことない!」

やっと少女はきちんと言葉にできた。だが、

「私に嘘はつかないで!」

まさか妹がこんなに怒っているとは少女は思っていなかった。いつもは穏やかな妹がこんなに怒鳴ることは今までになかった。それに驚き少女はしばらく何も考えられなかった。

「たった二人だけの家族なんだから、私に隠し事はしないで。お願い。」

妹は涙を流していた。妹はただ姉に隠し事をされていたのが嫌だったようだ。それに少女は気づき、

「ごめんね。私いつまでもセラには元気でいて欲しかったから。」

「私だっどお姉ちゃんには元気でいて欲しいよ。だから今度からは私にだけっど言うのは無しだからね。」

少女はうなずいた。

「絶対に嘘はつかないでね。それと、危ないことはしちゃだめだよ。」

「わかった。」

そうして二人は一つのパンを半分に分けて食べ始めた。いつまでも二人で仲良く貧しくとも暮らしていけると思っていた。だがそれが終わりになる日も刻々と近づいてきているのであった。

光の世界1

「はあ暇だ。」

一人の少年がため息をつきながら窓から外を眺めていた。その少年がいる部屋はきれいに片付いていてシンプルな感じだが家具や周りを見渡しても高級そうな物ばかりだった。

「なんか面白いことでもあればいいのに。ったく、こんな世界になんか生まれてこなけりや良かった。」

全てが丸く収まってしまふこの世界に事件などおきない。事件を起こそうとしているやつがいても事前にそれが見つかってしまう。なぜだか知らないけど。神によって守られているとは昔から聞いているけどそれが本当なんだかどうだか。

「はあ。」

またため息をして窓から離れるとドアからノックの音が聞こえ扉が開き一人の女性が入ってきた。

「あら、まだこんな所にいたの？早く仕度しないと遅刻するわよ。」

「うん、わかったよ。母さん」

少年の母は穏やかに声をかけ返事を聞いたらまた部屋から出て行った。

(今日も退屈な一日の始まりか。)

「いつてきます。」

玄関の扉を開きながら、家族に向かって少年は言った。

「いつてらっしゃい。」

そして少年は学校へと向かっていった。と少年の家族は思っていた。

(今日はどこへ行くのかな?)

少年はいつもこうやって学校へ行くふりをしているんな場所へい

っている。それが家族にばれる事はない。学校は基本的に自由参加みたいなものなのでいつ行っても構わないようになってる。だから学校側と家のほうでの連絡等は全くない。昼間街中を歩いていたって知り合いにさえ会わなければ良いことだ。

「おはよう。」

「?!お、おはよう。ってまたお前かよ、ミア。」

少年はいきなり後ろから声をかけられたのでビックリした。その正体は同じ学校へ通う少女だった。

「今日もどこかへ行くつもりだった?」

「お前には関係ないことだろ。」

少女は少年が学校をサボってどこかへ行くことをよく分かっているようだ。

「いいかげん家の人に本当のこと言えば?それか今から私と一緒に学校へ行くか、どっちかよ。」

「どっちも嫌だね。」

そう言っただけ少年は少女から顔を背け去っていきこうとした。

「もう、ばれたって知らないんだからね。」

少女は最後にこう言っただけ追いかけることも無く少年を見送っていた。

「うるさい女」

(いつもいつもあんなこと言っただけ。実際あいつ家の人に俺のことばらした事無いんだよな)

そんなことを思いながら、どこかへ行くあても無くうろつくと歩いていた。そうして少年はいつもと同じ一日を送ろうとした。これからこの世界のことをもっと恨むようになることが起きようとは少年はまだ知らなかった。

闇の世界2

「じゃあ行ってくるね。おとなしく寝ていてね、セラ。」

「お姉ちゃんも気をつけてね。」

そして少女は家を出て行った。いつもと変わらぬ朝だった。荒れ果てたこの街ではただ不気味にカラスが鳴いている。また食べ物を盗んでこななければいけない。そうしなければ私たちは生きてはいけないのだから。セラには心配ばかりかけてしまいがそれも仕方ない。セラは病弱な体なのだから姉の自分が何とかしなくては。

「今日も上手くいくかしら。」

そして少女は街の方へと歩いていった。

「お姉ちゃん　私がこんな体じゃなければ」

セラはうつむきながら考え込んでいた。姉にばかり負担をかけてしまうことを悔やんでいた。生まれつき体が弱いためになかなか外に出ることもできない。両親をすぐに無くしてしまったために姉に頼って生きていくしかない。こんな情勢の世界では一人で生きていくのもやっとなだというのに。これ以上頼ってばかりではいけないとセラも思い始めていた。

「何か私にできることは無いのかしら　」

そして窓の外を眺めていた。何か自分にできることは無いのかと。少しでも協力できればいいと、そう思いながらずっと眺めていた。すると、いきなりドアがすごい勢いで開かれる音がした。誰かはこちらの方へやってくる。

そしてもう自分のそばまでその人は来ていた。

「あなたは誰？」

寂れた街の中をただ一人少女は歩いていた。今日はどこから食料を調達しようかと。さすがに同じ所でまた盗んでくるわけにもいかない。顔を覚えられてしまうから。だがここ最近はこの辺りばかりで盗みを働いてきた。そろそろ違う場所へ移さなくてはいけないとは思ってきたものの、なかなか盗んでこれる場所が無い。どこも貧乏で盗むのにも気が引けてしまう。まだこの辺にはお金持ちともいえないかもしれないが自分たちよりは裕福な奴らが住んでいる。だからこの辺りばかり狙ってしまうのだ。

「まだ顔が知られていなければいいんだけど」

少女は周りを少し気にしながら顔を見られないようにうつむいて歩いていた。どこかいい場所はないかと。

（なんか今日はいつもより人が少ない。どうして？まあその方が私のはうれしいけど。）

もともと外を出歩いたりする人は少ないのだが、今日はいつもにまして人が少ない感じた。

「今日はここかな。」

少女はちよつとは裕福そうな家を見つけその場所に決めた。どうやら人の気配は無い。留守のようだ。家の電気も消えている。

（前に盗んだところからたいして離れてないけどだいじょうぶだよね。）

少女はこっそりと誰にも見られぬようにその家の敷地の中へと入っていった。

光の世界2

少年はただ街中を歩きつづけていた。行くあても無かった。適当に歩いているしかない。

どこを見回してもみんな笑顔だ。自分の思うように生きて暮らせる。犯罪などは別として。でも本当にこれでみんな幸せなのか？自分で何の努力もせずに望むことはほぼ叶えられる。こんな世界で何が楽しいんだ？少年はいつもこのようなことを考えて毎日を過ごしている。けれど何もできない。犯罪なんか起こしてしまつたら殺されてしまつかもしれない。

「なあなあ聞いたか？とんでもないことをたくらんでいる奴らがいるって。」

ふと噂が聞こえてきた。少年は気になって近くにあつた本屋で本を眺めながらこっそりその話を聞くことにした。

「一体どんなことだよ？」

もう一人が聞き返した。

「なんでもそいつら、この世界を変えてやるとか言う手紙を政府あてに送つたっていう噂だぜ。」

「おいっ、それ本当かよ。馬鹿な事する奴もいるもんだな。でもよく手紙を出せたな。そいつらどうなるか分からないぞ。」

話をしていた二人は笑いながら去っていった。

少年はそれを眺めながら考えた。

本当にこの噂が本当だつたらとんでもないことだ。だがもう噂まで流れているってことはきつとそいつらは消されているに違いない。この世界で犯罪を起こすなんて不可能なのだから。この世界には監視者がいる。監視者つてのは日々この世界を監視しているらしい。何か不穏な動きでもあつたらすぐに対処する。どんな小さなことでもだ。それにしてもこの世界を変えるってどういう事だ？俺と同じ考えの奴でもいるっていうのか。

「今日は暇にならなくて済むかもな。」

少年は今見ていた本を置いて、雑誌を見た。

「載ってるわけ無いか。さっきの奴らに聞くのもあれだしな。」
手にした雑誌を元の場所へと戻した。

「図書館にでも行って調べてみるか」

そう言っただけ少年は、その場所へと向かっていった。図書館に行けばいろんな資料があり、一番最新の情報も置いてある。調べるとしたらそこへ行くのが一番なのだ。

この世界を変えるって事は、俺と同じ考えなのか？もしそうならそいつらに会ってみよう。俺もただじゃすまなそうだけど。でも手紙を送ることができたなんてすごいな。いつもならそんなことは無いはずなのに。こんなこと初めてのことなんじゃないのか。まだ監視者に消されてなければいいんだけどな。これが単なる噂だったら最悪だな。

そんなことを思っているうちに少年は図書館に着いた。

「着いたな。」

そして少年は中へと入っていった。期待を膨らませながら。

闇の世界3

人気の無い家の中で一人の少女の足跡だけが聞こえる。この家は今留守のようだ。家の中に入ってから少女は安心した。誰か一人でもいたらこんなに静かになるはずは無い。泥棒するには最適だ。だが何か嫌な予感がする。いつもならこんなことは滅多に無いのに「早く盗む物盗んで家に帰らないと。」

少女は家の台所へと向かった。食べ物さえ手に入ればいい。空腹さえ満たされればいいのだから。

「なんか今日は簡単に行き過ぎて不気味ね。」

少女は台所で食べられる物を持てるだけ持った。これで当分は大丈夫だろう。あとは誰にも見つからずに自分の家に帰るだけ。そうして出口へ向かおうと思いつき振り返った。すると、

「残念だったなあ。そう毎回毎回こそ泥にやられてたまるかよ。」

この家の住人の男が隠れて待ち伏せしていたのだ。盗んだところを捕らえようと。油断しすぎていた。そもそもこんな事をするのは私だけじゃないんだ。そんな中でこんな家を留守にしているわけがない。早くここから逃げなきゃ。

「そう簡単につかまってたまるか。」

少女は盗んだ物を持って必死で男を振り払い出口へと向かった。

「待て！逃がすもんかっ。」

後ろから男が追いかけてくる。だが、目の前にはドアが見えてきた。足の速さには自信がある。外に出てさえしまえばそのまま逃げられる。

「もう少し」

そして少女はドアノブをつかみドアを開けた。すると、

「え？　うそ」

少女は目を見開いた。少女は今のこの状況を飲み込めないでいる。少女のその目の前には……

「ハハハ。どうした？逃げないのか？」

少女の目の前に立っていたのは、昨日少女がパンを盗んで追いかけてきた男だった。・・・そして、もう一人

「っお姉ちゃん」

妹、セラだ。セラが首元に包丁を向けられ人質とされていた。

「おいつ、どうした？早く逃げればいいだろう？このまま走ってけば逃げ切れるぜえ。まあおまえが逃げたらこいつを殺すがなあ。」

男は包丁をセラの首に近づけた。

「ハアハア 間に合ったか？」

家の住人の男も追いかけてきて家から出てきた。どうやらこの二人はグルだったらしい。逃げようと思えば逃げれるがこの状況じゃ逃げられない。

「どうして？」

ようやく少女は口を開くことができた。

「俺らだつてこのまま小娘ごときに食べ物盗まれてちゃやっていけねえんだよ。ただでさえこんな世界だ。小娘に何か盗まれたっていったらそこいら中の奴らにやられちまう。だからお前を何とかしなくちゃいけなくてな。それでだ。ただお前を殺すってよりもこういう事をした方がお前に一番効くんじゃないかって思ってたわざわざこんな手の込んだことをやったんだよ。周りへの見せしめにもなるしな。」

どうやら運が悪かったようだ。嫌な予感が的中してしまった。昨日あいつのところへ盗みに行かなければ、今日この家に盗みに入らなければ、今日ずっと妹についていれば。

少女は後悔した。昨日のこと今日のこと。もし少しでも注意してたらこんな事にはならなかったのかもしれないと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0036b/>

Othello

2010年12月22日17時25分発行